

化学教育 徒然草

— かわいい子には旅をさせよ —

HAYASHI Takashi

林 高史

大阪大学大学院工学研究科 教授,
2019年度～2020年度 日本化学会 理事, 2023年度 日本化学会 近畿支部長



「日本の学生は英語が下手」と言われて久しいが、最近の学生の英語能力は昔に比べて確実に上達している。国内学会でも一部は英語発表を取り入れ、研究室に滞在する留学生数が増加し、英語を使う頻度が増えたことも功を奏している。子供のときから英語学習に積極的に取り組んでいることも要因かもしれない。ちなみに私が若き頃の1980年代は、学生が学会で英語の口頭発表をする機会はなかった。今の学生は英語で発表する機会に恵まれ、ある程度の質疑応答も円滑にこなす能力を有している。しかし英語能力があればそれでよいのだろうか。英語試験のスコアが高くても海外の人との会話が続かない学生がしばしばいることも事実である。

私は幸運なことに、修士課程の学生るとき（1985年）に、指導教授からフィレンツェ大学への留学を勧められた。当時ポスドクとして海外に行く先輩を時折見ていたが、学生の身分で海外の研究室に滞在して研究をするケースはまだ極めてまれだった。今ではインターネットを駆使して、留学前から自分が住むアパート周辺の様子やラボの雰囲気、街のバス路線図まで把握できるが、私がイタリアに向かったときは「ローマまで飛べばなんとかなる」程度の気持ちで、実はローマ空港からフィレンツェまでの道程を全く知らずに（調べる手段もなく）渡航した。今から思えばまさに大冒険だった。しかしフィレンツェ大学の研究室に滞在中、見るものすべてが新鮮で、本当に素晴らしい体験をし、度胸も幾分かついた。同様な貴重な経験を今の若い世代にも享受してもらいたく、自分の研究室のほぼすべての博士課程学生に対して数ヶ月間の欧米への留学を推奨している。もちろん観光や学会で海外に渡航しても、それなりに得るものはあるが、やはり現地の研究室に1人で飛び込んで、現地の仲間と一緒に実験し、現地のポストとディスカッションを行い、その土地で生活することは、学生が大きく成長する良い機会であり、実際ひと回り逞しくなって戻ってくる。国際化が重要視される昨今、化学と英語がある程度できることは大前提であるが、海外の仲間といかにコミュニケーションがとれるか（化学だけでなく、いろいろな話題で会話が弾むか）が、国際交流には欠かせない。英語能力の涵養も大切だが、やはり豊富な経験がものを言う。とにかく多方面に興味を抱いて、早いうちに勇気を持って海外に飛び出し、グローバル感覚を身に付けると同時に一生の仲間を作ることを若い人に強く勧めたい。

[連絡先]

565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 (勤務先)